

れよりも注目すべきは、電気自動車である。同社が販売する「REVAクラシック」は、タケオカが開発し、インド・バンガロールのREVAエレクトリックカー社に生産を委託している。このREVAは鉛電池を搭載し誘導モーターで走行する小型車で、航続距離はカタログ値で八〇キロとなっている。街乗りなど狭い地域内の移動手段としては問題ないが、市場はまだ小さい。

産業機械の中堅企業として、**日本工装機**（東京・中央区）もインドで健闘している。同社は中国での大きな成功に続き、インドでは自動調節弁を中心とした計装機器の製造・販売の合併事業をケララ州で行っており、インド以外にも中国、韓国、シンガポール、米国、英国ですでに海外事業を行っている。創業者の池谷隆司社長は八十歳に近いにもかかわらずいまだに現役で、スズキと同じようなトップダウン型の経営を推進しており、今後が期待できる。

最後に、医用機械の販売ビジネスで成功している**エルビスエンジニアリング**（株）も特徴的だ。詳細は事例に譲るが、インドへの特化と腰の入れ具合という点では、日本の中小企業の中でも、特筆に値する。

意外に多い 農業・食品関係の進出

インドに進出している日本の中小企業の

中には、農業関連の企業も少なくない。例えば**榎サタケ**（広島県東広島市）はインドで、米、麦、トウモロコシ、レンズ豆などの穀物・食品に関する機械設備・プラントの販売およびアフターサービスを行っている。取扱商品は、**籾摺機**・**籾選別機**・**精米機**・**研米機**・**色彩選別機**で、とりわけ輸出用米の加工・選別機として利用されている。それまでの成功をもとに、二〇〇六年にはデリーのインド支社を現地法人に格上げした。このことにより、自社による現地資材調達や据付工事業務、従来の製品販売からプラント販売および営業所の設立まで、トータル・エンジニアリングとアフターサービスの充実を図っている。なお、グジャラート州の大地震の際には、サタケの非常食（マジックライス）が重宝がられたこともよく知られている。

もう一つの成功例としては、**新田セラチン**（大阪市）があげられる。同社はセラチン製造では国内最大手であり、インドでのビジネスも長い歴史を持つ。同社はケララ州で牛由来のセラチン原料の中間品を製造し、大阪・八尾市の同社工場へ輸出している。これは、日本国内における環境問題等に関連する高コスト化への対応であり、最近では西部グジャラート州に一年一月に稼働開始予定の新工場も建設している。種子メーカーもインドへ進出している。

最初に進出したのは、ミニトマトで知られる

る**トキタ種苗**（さいたま市）であったが、この成功に続いて大手二社の**榎サカタ**の**タネ**（横浜市）と**タキイ種苗**（京都市）もインドに現地法人を開設した。このうちサカタは、アジアのトウガラシの開発拠点を韓国に持っているが、将来はインドにも試験農場をつくる計画である。サカタはキャベツなどをすでにインドで販売しているが、自社ブランドとしては販売していないため、今後は自社ブランド化を図る方針である。

近年日本への輸入が解禁されたマンゴーのビジネスでは、日本の専門商社として唯一の**南シタール**（千葉市）があげられる。同社はマハラシュトラ州の契約農園でアルフォンソ等の高級マンゴーを育成して日本へ輸出しているほか、同州産の野生黒蜂蜜も日本で販売している。同社の増田泰三社長は千葉市検見川にシタールというインド料理店も経営しており、インド関係の日本人の間ではその人柄とインドに関する知識から評判が高く、日印協会の評議員も務めている。

インドで成功している 企業に共通するもの

インドで成功している中小企業に共通しているのは、①オーナー系のトップダウン経営で、②業界ではコスト面での競争にさらされない特殊な技術を持ち、③国際展開